

<b>Title</b>	近代文明批判における「蔭」認識：石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって
<b>Author(s)</b>	稲田, 敦子
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 24(2), 2012. 3 : 55-64
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3673">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3673</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

## 近代文明批判における「蔭」認識

——石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点をめぐって——

稲田敦子

The Aspect of "Shadow" in the Criticism of Modern Civilization:

A Comparative Study on the Thought of Sanshiro Ishikawa and Edward Carpenter

Atsuko INADA

The main objective of this paper will be to examine the aspect of "shadow" in modern civilization. From the criticism of the view of nature in the Enlightenment arose a philosophy that aims for a restoration of the organic view of nature and sees a new organic relationship between people and nature.

Edward Carpenter (1844~1929) was keenly aware that nature was entering a critical state, and he questioned the one-dimensional nature of the idea of progress in the forward thrust of modernization. Sanshiro Ishikawa (1876~1956) translated *The Civilization: Its Cause and Cure*<sup>(1)</sup> in which Carpenter examined problems occurring in the modern civilized society of England, where modernization first began, and where it is widely recognized that the factory system began with the Industrial Revolution. It is widely acknowledged that the Industrial Revolution's threat of mechanization and the danger of injury and death caused by mechanization destabilized the labor environment. Ishikawa and Carpenter elucidated what the basis of life should be and experimented with the idea of revolutionizing lifestyles by undertaking production activities in harmony and through intimate communion.

---

**Key words;** Criticism of modern civilization, the theory of endogenous development, cooperative society, Edward Carpenter, Sanshiro Ishikawa

**Key words;** 近代文明批判, 内発的發展論, 協同社会, エドワード・カーペンター, 石川三四郎

## はじめに

本来、人間と自然との関係は、非常に深く根源的なあり方であったが、現代は、自然の構造とそこにおける人間のあり方およびその文化的営為の意味を考えざるを得なくなっている時代である。人間と自然との関係性を自覚することにより、人間の人間的な生存そのもの、さらに真に人間たらしめる基盤を検討するには、現代にいたるまでの文明の発展過程における「蔭」の側面を看過できない。産業革命は、いわば理性による外的自然に対する自然処理過程としての文明を進行させる段階を技術革新と労働形態の変化とともに提示したものであったといえよう。しかし、19世紀前後からの革命と反動との複雑な時期に、「自然化された自然」と「自然化する自由」の問題が提起されてくる。

それは、一方では、「人為とは、〈自然〉が作りだしたもろもろの道具の助けを借りてはたらいっている〈自然〉にほかならない」(オルバック)という認識が、人為的な諸制約を批判する方向に働き、自然に対して無制限に働きかけようとするさまざまな運動を展開させていった。他方では、自然との不可分な関係の中にこそ人間存在の根幹があるのであり、近代文明はその自覚を喪失させていくという主張を通じて近代を批判するとともに、自然の意義をあらためて認識するという問題提起がなされてきた。本稿では、このような過渡的な状況にあって、近代文明の「負」の側面を先駆的にとりあげた石川三四郎とエドワード・カーペンターの思想的接点を検討する。

## I 近代文明における「蔭」への警告

### (1) 石川三四郎による「蔭」認識

「個人の保守は迷ふて執着となり、罪業となる。社会の保守は迷ふて压制となり、暴虐となる。そして個人に於ては悔み改めによって、これを補修しやうとし、社会に於ては革新または革命によって、これを改めやうとする。故に圧政と暴虐とは、生命の原則たる保持の幻影作用であり、既にレエゾン・デエトルを失へる制度なり思想なりを保持しやうとする執着である。」<sup>(2)</sup>

これは、石川三四郎によって第二次大戦中の厳しい時代状況の下で書かれたものであるが、罪を意識する前段階として、人間における負の側面である「蔭」が認識され、そのあり方が深く洞察されている。その深化の過程で、人間の本質に切り込むことにより、個人と社会の変革について、石川独自の思想的世界が展開されるのである。石川は、日露戦争に対して、内村鑑三らの非戦論に共鳴し、自ら非戦の立場を明らかにして『萬朝報』社を辞し、平民社の一員となるが、実質的な活動を始めたのは、『新紀元』の編集者として執筆および発行の責任を担ってからである。また足尾鋇毒問題を先駆的に告発した田中正造から大きな衝撃をうける。このことも一つの契機となって、個人

の内的な問題と社会運動における組織論とのせめぎあいとが常に問題となり、それは、石川自身の自己内部の問題とあいまって深化されることとなる。

「予は、社会的協同と個人的自治とは人生生活に欠くべからざる両方面より見たるに過ぎぬと思ふ。……併し、此両面の関係は決して不調和のものでは無くて寧ろ相互に欠く可らざるものである」<sup>(3)</sup> ここでは、自我という独立の自覚があって初めて自治という作用が起こるものであり、また、自我に自治の能力があるが故に、協同生活の実もあがると提示されている。また、この協同生活の実があがって、初めて社会が成立すると主張する。しかし、現実の状態では、個人と社会との間に衝突があるのは避けられない。この原因を、石川は、固定的な社会制度や習慣にあるとともに、「人民が『物慾の蔭』に弊れたからである」<sup>(4)</sup> と見るのである。

## (2) 「物慾の蔭」

ここにみられるように石川が認識した「蔭」は「人間の本情にして心靈の翼たる一人間が之に依て活き之に依て動く処の一物慾の蔭」<sup>(5)</sup> である。ひとたび「我等の心靈」が「物慾の翼」を得て動くと、同時にこの「蔭」ができる。物慾は、「天真の物慾其のものを満足する」にとどまらず、「我が蔭」を追及し始める。それは、追えども果てしがないうまま、一身のみならず、社会をも危うくする。その意味で、「蔭」ほど恐ろしいものはないという。

しかし、ここで、「物慾其のもの」と「蔭」とは、明確に区別する必要があることが主張される。ここで言われている「物慾」とは、人間の生存欲求または生活に必要な物質を求める心を意味するが、この両者を識別することができないまま、その蔭までを本来の欲望そのものと思ひ込むとき、人は「名に迷って、自己の使命を忘却するといふ始末になる」と述べて、「蔭」にとらわれてしまうことの危険性を指摘しているのである。この「物慾其のもの」と「蔭」との識別ができないあり方を、石川は一方では「世の物質主義者」に見、他方では「世の精神主義者」に見ることによって、双方に現実認識の片面的な解釈があると批判している。「(然るに)世の物質主義者は、往々其蔭までを本来の物慾として之を満足することに賛同するのである。是れ彼等が物質實在の原理より其の発動たる物慾を人間の本情となし、而して未だ『物慾其のもの』と『物慾の蔭』との差別を知らざる為に総てを物慾と認むるより起る所の誤謬である」<sup>(6)</sup> と彼は指摘している。このことは、こうした物欲が先行するあり様に、「モノ」が優先する物質文明に価値が傾いている状況を見ていた現われであろう。石川は、「物慾」そのものを決して否定しているのではない。また、人間に内在する混沌とした種々の要素の主たるものの一つとして、本能的な欲望の存在それ自体を否定的に捉えられていてもない。むしろ、この欲求の自然な発露をゆがめ、阻止し、また他方では過剰に増大させてしまうものに対して警戒し、批判の眼を向けているのである。

石川は、こうした批判の眼を外在的なものとともに自己の内部に向けることによって、内面的な「蔭」の存在を意識したのであった。よって、「世の精神主義者は、往々にして人間本来の感情たる

物慾其ものをも之を『罪』なりとして斥くるのである。是も亦物質主義者と同原因よりして此の如き誤謬に陥ったのである。即ち彼等は『物慾其もの』と『物慾の蔭』との区別を知らぬ為、而して『物慾の蔭』の恐ろしき弊害を憎むの余り、遂に本来の物慾其もの迄も罪惡なりと誤認する様になったのである<sup>(7)</sup>として、「物慾の蔭」の内的意味を問わない精神主義者たちの一方的な論理が、その一面性において物質主義者と変わらないものであることをも指摘することとなる。

### (3) 構造転換期におけるカーペンターの近代文明批判

近代化が推進されるにつれ、社会システムは発展し高度化していくが、そのことによって従来の生活基盤はおびやかされ、ときには解体される危険にさらされる。また肥大化した社会関係の中では、個的な存在はまわりの状況に封じ込まれ、その結果として、人間の現実的な存在感は希薄となっていく。とくにイギリス資本主義の構造転換に連動して、カーペンターは、この希薄化をめぐる危機状況を強く意識することとなった。

カーペンターの生きた時代は、産業革命後の工業化の進展がもたらす社会の変化に揺れていた。工業化の矛盾が集約的に顕在化した1850年代は、イギリス史の中で光と影のそれぞれの振幅を大きくさせていたが、その時期にカーペンターは多感な時期を過ごすこととなる。この時期にすでに彼の生涯の課題となった近代文明がもたらす問題が意識されていたのである。彼は、きわめて文学的な形で近代文明がもたらす否定的な側面をとりあげていた。カーペンターによる「社会調和論」では、「自我の実現」や「人格の完成」は、一個人だけではなく他者を意識し、各々が他者を認めることが第一であり、そのようなものとして配慮する意思をもつ人々の間に存在する社会を一つの理念型として提示した。

カーペンターによる *Civilization: Its Cause and Cure* (1889) では、人間と自然との宥和的關係の危機をめぐる近代文明批判が基盤となっている。そこでは、双方を危機的状況に陥らせつつあるものに対する鋭敏な意識が見られるが、人間がその「内的自然」の統一性を失い、現実的存在感から遊離していくあり方に注視し、さらには、自己内部においてこのような状況に歯止めをかける契機を持ちえなくなることへの危機感をつのらせたのである。

カーペンターが指摘した「調和の喪失」状態は、この本質的価値の喪失をも意味するが、その対象は人間と国家の關係にも及ぶことになる。生活の平和的安定と秩序を維持する外的機構としての国家は、本来個人の労働と生産の体系を安定的に維持するためのものであった。しかしこのような国家によって支えられる体系が拡大すればするほど、それは自然と対立した人工的領域の拡大を意味することになり、個人の内的価値からの乖離は大きくなる。しかもこの文化の領域を支配する論理が機械論的なものであるかぎり、それ自身が人間の相互疎外をもたらさざるをえないような構造となる。

この疎外状況に関してカーペンターが警告しているのは、個々人それぞれにおける自己内部の「統

一の喪失」である。これは、自己内部において、外的自我と内的自我との不統一という自己意識の中で渦巻く個的状况を見据えることから出てきたものだった。個人の自由な自己決定の余地が各側面から侵食され、縮減されていく中で、自己の性の創造的な運動が変質していく。そしてこの運動の源である生のエネルギーは、方向をかえて、断続的な「硬直」したものになってしまう。いわば、内発的な創造性が喪失した内実のない形態のみが残るのである。これには、カーペンター自身がケンブリッジ大学での聖職フェローを辞するに至るまでの内的煩悶や苦悩も大きく影響している。硬直された静態的な自律は、客体への能動的な関わりにおいて自己を高める主体性を与えることはできない。また、対象知に拘泥する人格は〈我—それ〉の関係のみに生きることになる。この関係の展開過程で、〈自然〉世界に対しての際限ない支配の拡張が人間理性の専横によって進められていった結果、人間自体までもがこの過程に組み込まれることから回避しえぬこととなる。カーペンターは、この硬直性から脱却する自己更新への志向を、〈いのちを失った環境〉の回復とあいまって模索することになったのである。

## Ⅱ 「具体の事実」をめぐる「蔭」認識

### (1) 足尾銅山での「生活破壊」

石川による「蔭」認識の基底には、「言葉」からの解放、いわば観念的思念との訣別がある。それは、次のような彼の主張に明確に表れている。「凡そ人間の言葉は空なものである。莊周は夢中に夢を占ふと言ったが、人生はそれほど幻影を追及して喘いでるのである。……それ故に、吾々が自ら解放せられやうと思ふならば、先づ第一にこの束縛から解脱しなければならない。一切の言葉を棄てて具体の事実を静観しなければならない。」<sup>(8)</sup>

彼が、「具体の事実」に眼をむけることの重要性を説いたのは、足尾鉍毒事件による谷中村民の悲惨な状況が示しているような近代資本主義文明がもたらした「蔭」の現実であった。足尾銅山は明治政府の富国強兵政策に沿って、生産額を飛躍的に増大させたが、その一方で硫酸銅や硫酸鉄を含んだ鉍毒水を未処理のまま排水するとともに、精錬に必要な薪炭を得るために付近の山林伐採を進めた。その結果、地域住民の生活の基盤となる水・土・森林が侵されるという人災がもたらされた。すなわち、「いわゆる経済合理的な活動をおしすすめる結果、その外部で生ずるプラス、マイナスのうち、プラスは私企業のものとなり、マイナスは弱者によって負担される」<sup>(9)</sup> という状況が生まれたのである。

石川は、1924年に「養芽論」という短文の評論を『萬朝報』に載せている。そこでは、田中正造が述べた「政治運動をしている間に、肝腎の人民が亡んでしまった」<sup>(10)</sup> という言葉を数回にわたって引用しながら、ものごとの本来の目的、核ともなるべき大切なことが見失われていく状況を強く警戒している。それは、人びとの生き方の根幹をなす生活環境をとりあげたものであり、そこには

現在の環境問題に対する先駆的な提起がなされているが、環境の問題を倫理と関連づけて問い返しているところに大きな意義がある。1891年9月の田中正造の日記には、すでに「鉍毒」という文字がみられるが、それは1890年8月23日に起こった大洪水に関してであった。50年ぶりと言われたこの年の大洪水であったが、その被害は旧来の水害とは全く様相を異にしており、足尾鉍山の鉍毒を天下に告げた最初のものであった。かつては洪水が上流の腐葉土を運び、かえって農作物にとっては都合がよいこともあったが、この大洪水では、鉍毒に冠水した稲は腐ってしまって、ついに穂は出てこなかった。また、この川の流域は栃木県内の養蚕地帯でもあったが、桑の木の8割から9割近くが枯れてしまい、地場産業への打撃も大きかった。黄色く立ち枯れた草木の残骸だけの流域一帯は、荒涼としていたという。

足尾鉍毒事件の帰結としての谷中村民の強制的な生活破壊を目の当たりにした石川は、近代資本主義文明への批判を強めるとともに、「亡国」意識の前提となる「国」そのものへの疑問を示すこととなる。この疑問は、ヨーロッパへの亡命生活から帰国した後もひきつがれ、その後日本が次第に軍靴の足音が響くなかで強められていく。亡命中には、第一次世界大戦でのドイツの軍国主義に対し、徹底抗戦を掲げ、和平促進運動に対する講和の尚早を宣言した「十六人宣言」<sup>(41)</sup>の一人として名をつらねることにより、軍国主義的侵略に対して人類愛と社会正義の精神とをもって、徹底的に闘うという立場を明らかにすることになる。石川が軍国主義への絶対排撃を貫くことは、「国家」を「相対化」させ、国内的には国外的にも拡張していく国家権力に歯止めをかけることだったのである。

## (2) シェフィールドでの“the Great Wen”としての「瘡」

科学的文明の継続的を信じ、そのことが知性の発展と同義語となっている状況では、自然は規範の源ではなくなり、イギリスでは、19世紀を通じて、工業化と都市化が進展したが、それにともないさまざまな問題が生じていた。工業部門の国民所得が農業部門を上まわったのは1821年であったが、消費財の単一市場としては世界最大となったロンドンについて、ウィリアム・コベットが“the Great Wen”（大きなおでき）と指摘し、当時における大都会の社会問題を象徴的に捉えたのは、1930年のことである。“wen”は、身体の特に頭部にできるもりあがったおできのような皮脂嚢腫であるが、イギリスが世界の工場としての工業製品を生産するとともに、その産業廃棄物をも同時に排出し、それが人体にとっても社会に対してもその健全な発展とは正反対の「負」の要因となって健全なあり方へ深刻な弊害をもたらしてきた状況を象徴的に表した言葉であろう。このことを、エドワード・カーペンターは、シェフィールドでの鉄鋼業がひきおこす煙害問題をいち早くとりあげた。

1889年5月、カーペンターは、『シェフィールド・インディペンデント』にシェフィールド全市街における「煙公害」について投稿することによって、煙害問題の口火を切った。「巨大な濃い雲だけ

が、天空へと立ち昇り、その雲は分厚く、そのなかで人間がどのようにして生きながらえるのか、私には不思議におもわれた。大きな祭壇から昇る煙のようで、まさに数千人の生命がそこで犠牲にされる祭壇のように思われた<sup>(12)</sup> というシェフィールド市街の状況は、繁栄の時代の「蔭」の側面を端的に現している。「巨大な雲」の下では、子供はいうにおよばず、十万人の大人が、わずかの太陽と空気を求めて争い、あくせく働き、息の詰まる生活をするなかで、汚れた空気と光の欠如が原因でかかる病気で命を落としていく人々がいたのである。この煙害阻止のための運動は、きわめて現実的にそして具体的に進められた。カーペンターは、シェフィールドのファース・カレッジで「煙公害とその救済策」と題して講演し、ヴィカーの給炭機のような煙を出さない装置を調べ、これにより煙公害は防止できることを提唱した。当初は製造業者に費用負担がかかっても長期的にはかなりの経費節約になることともあわせて提起し具体的な対策をも示した。この当時、伝染病が多く発生しており、これは都市部の廃棄物による河川の汚染が要因となっていることを明らかにして警告が発せられたが、大気汚染や煙公害についてはまだ手つかずの状態であった。1881年と翌年に「減煙」展示会が開かれはしたが、カーペンターが『シェフィールド・インディペンデント』紙上でこの問題を公表して以後、はじめて煙公害の問題がとりあげられ、北部諸都市に設立された「減煙」協会が煙害防止装置の利用促進に積極的に取り組むこととなったのである。

### Ⅲ 思想的接点としての「蔭」認識

#### 一 「横の道義」の分断の認識から「実体一人格」的關係への志向へー

石川三四郎とエドワード・カーペンターによる社会の「負」の側面への視点および時代状況下での「具体の事実」としての「蔭」の認識の内容は、以下の3点にまとめられよう。第1は「強権資本主義」文明批判、第2は対外侵略批判、第3は現実の生活破壊への批判である。これらの3点は単独の問題ではなく、相互に関連を持っているが、特に日々の生活基盤が侵されていく厳しい状況の第3点が強調されている。国家自体は「高度の」文明と富によって発展しているが、その一方でその発展からとりのこされていく国民は、物心両面での厳しい状況から抜け出せないままであった。この政治・経済的閉塞状況をつくりだし、さらにその状況の改善の見込みがないまま生活基盤が侵されていく厳しい進行状況が、石川とカーペンターが最も問題視した「蔭」認識であり、思想的接点であった。

「此の社会病は抑もどこに原因するか」と問い、その答えを「縦の道義があつて横の道義が無い」ことに求め、「『臣道の実践』が封建幕府の忠義の模倣に終らんとする如き危険性を露呈する所以が此処にある<sup>(13)</sup>」としている。国内における「横の道義」が「縦の道義」によって分断されている状況は、個々人の生活が単に分断されるのみならず、相互に敵対する関係で進行していくことを意味する。石川は、物心両面における閉塞状況をもたらしているこの「横の道義」の欠如を「紛失された

個人主義」として告発したのである。この告発は、人間の「生活事実」に根ざしたものであった。

本来、「社会（的集団）は、軍事によって、政治によって、ないし教化によって、生存を保っているものではなく、一般社会人の協同的生活行動によって生存していくものである」<sup>(14)</sup> この社会的生存を保障する生活における「共働」は、弱者によつての生活の基盤となる。それがいわば「生活事実」であった。すなわち、自然界において生理的にも肉体的にも強いとはいえない人間は、自己保存のための「共働」が生存に適しており、その意味でも「人間の社会的生存の原始状態」のありようが人間の「社会性」をめぐる基本的性格を規定することになる。「横の道義」とは、この「共働」のあり方に対する彼独自の表現であった。しかし、石川に特徴的なことは、この「共働」を行う場を社会に限定せず、直接生産に携わるという意味を含めて「自然」に求めている点にある。すなわち、「土民生活」思想の提唱は、この「自然」において「共働」をおこなう自治自立組織の形成を、実践的課題として提起されたものである。石川はカーペンターとイギリスでのミルソープでの直接的な交流でこの課題の意義を再確認したのである。

カーペンターの主著である *Toward Democracy* (1883) は、「視点を打ち立てるよりも個人的接触を見出そうとする書」であると、ルイスが評したことからも明らかのように<sup>(15)</sup>、この書の主題は、人間存在の精神的基礎としての共同性をめぐる精神的デモクラシーであった。このことは、「個人的人格における普通の原形を超える領域」が組み込まれていることを示している。彼には「俗物的で俗悪な民主主義」を精神的に昇華させることによって、「政治一般と最深部で関係づけ」る志向が強く見られるが、ここに開かれた領域は、社会関係における「機能—役割」的關係から「実体—人格」的關係への再生の可能性をさぐる試みの一つと考えられる。

## おわりに

「われわれは、今日、文明と称するやや特異な社会状態のなかにいる。それは我々のなかの最も楽天的な者にとってさえ、その全部が望ましいものだとは思われない。事実われわれの中には、それをもって諸種の民族が一度はかからなければならぬ……たとえば子供がはしかまたは百日ぜきにでもかかるように……一種の病気であると思っている者もある。しかし、それがもし病気だとすれば、そこにはまじめに考えてみなければならないことがある。」<sup>(16)</sup> これは、カーペンターによる *Civilization: Its Cause and Cure* の冒頭部であり、石川三四郎が訳したものである。

石川の思想的出発点は日露非戦論であるが、その後の「伝道の時代」という状況認識を強く意識することにより、『新紀元』に「堺兄に与えて政党を論ず」（1996年8月）を掲載し、組織自体の強権志向に対して警告を発した。また、「伝道の生命」にかかわる主体の問題を前面に出すことによって、堺利彦の申し出を「謝絶」した。このことを契機として、独自の思想形成を行い、どの思想潮流にも距離を保つこととなる。この石川がカーペンターの近代文明批判論に初めて出会ったのは、

堺宛の一文を『新紀元』に掲載した翌年であった。この時は『日刊平民新聞』の筆禍事件に連座していたが、カーペンターの著作に触れて「砂漠でオアシスに出会った」<sup>(17)</sup> ような思いと記していることを見ても、石川にとって大きな衝撃であった。石川はさらにカーペンターの *Love's Coming of Age* と *Toward Democracy* を読み、自らの思いを直接カーペンターに伝えるために、獄中から英文の書簡を友人を介して彼に送っている<sup>(18)</sup>。その後、「冬の時代」がはじまり、意見表明への規制はさらに厳しくなったが、石川は、1912年に『哲人カーペンター』をkarouうじて出版した。大逆事件以後厳しい状況が進む中で、石川は1913年3月フランス船で渡欧し、第一次世界大戦を間にはさんで1920年まで亡命生活を送ることとなる、その間に、イギリスのミルソープでカーペンターに会い、彼の協同思想を具象化したコミュニティでの生活をともに体験した。

石川とカーペンターは期せずして、ほぼ同時期にあって、状況は異なるが、しかし近代資本主義文明がもたらした「負」の側面としての「蔭」を見据え、人々の具体的な生活を犯すその問題性を指摘することにおいて先駆者となった人たちである。そこには、自然を媒介にした共同自治の生活から民衆の自由と自発性を生かす独自の社会倫理観がみられる。しかも、カーペンターには、また人間自身の内部における「蔭」への洞察があったことが、石川をして彼を師といわしめ、石川独自の複眼的課題に影響を与えることになった。この自己の内と外との解放を他者とともに求め、「土」に根ざして新しい社会の地ならしをすることは、共生思想の課題であり、両者はこの系譜に位置しているといえよう。

## 注

- (1) Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London 1889

石川三四郎訳『文明・その原因及び救治』日本評論社1948 訳者である石川は、思想的歩みだしをはじめたばかりの摸索の時期である1907年にカーペンターの書に出会っている。その後、亡命生活中でカーペンターの実験的共同体での直接交流を経て「土民生活」思想を提唱していった約20年間にわたり交流があった。石川はこの著作が日本の状況に対しても有益な示唆になるとしてすぐに翻訳を出版しようとしてが、時代状況等により、出版が実現したのは、第二次世界大戦後になってからであり、世界古典文庫の一つとなっている。

- (2) 石川三四郎「保守」『ダイナミック』第6号、1930年

- (3) 石川三四郎『虚無の靈光』p. 29

- (4) 前掲書 p. 18

- (5) 前掲書 p. 19

- (6) 前掲書 p. 17

- (7) 前掲書 p. 17

- (8) 石川三四郎『虚無の靈光』世界婦人社1908 p. 229

- (9) 都留重人「公害の問題」『人権の思想』筑摩書房1970 p. 337

- (10) 「田中正造日記」1910年4月1日『田中正造全集』第11巻 岩波書店 1977

- (11) 1915年、スイスにおける和平促進大会をきっかけにして高まった第一次世界大戦をめぐる即時停戦・講和締結の要求に対して、ドイツ侵略軍の利となる講和は尚早であるという宣言を発表した。(1916年2月)

- (12) Edward Carpenter, *My Days and Dreams: Being Autobiographical Notes*, London, 1916 3<sup>rd</sup> ed.

1921) p. 77

- (13) 石川三四郎「歴史の偶然性」(1941年)『石川三四郎著作集』第4巻, 青土社, 1977 p. 64
- (14) 長谷川如是閑『国家行動論』p. 146 ここでは, 社会は群的生存者の間にある「関係的心意」の成立によって出来上がったものではなく, 「関係的行動」の成立によって出来上がったものであり, したがって, 「その群が生存の行動において協同」することにより成立するものとされている。
- (15) Edward Lewis, *Edward Carpenter: An Exposition and an Appreciation* 1915 p. 290 (cf. Chushichi Tsuzuki, *Edward Carpenter 1844-1929, Prophet of Human Friendship*, Cambridge University Press 1980)
- (16) Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, (石川三四郎訳『文明・その原因および救済』日本評論社 1949 p. 21)
- (17) 石川三四郎『自叙伝』『石川三四郎著作集』第8巻 青土社 1977 pp. 195~196
- (18) 石川三四郎「カーペンター宛書簡 1909.12.14」『石川三四郎著作集』第7巻 p. 46

#### 参考文献

- 石川三四郎『自叙伝』『石川三四郎著作集』第8巻 青土社  
石川三四郎『虚無の靈光』世界婦人社 1908  
石川三四郎訳『文明・その原因および救済』日本評論社 1948  
キャナダイン, デヴィッド 平田雅博・吉田正広訳『イギリスの階級社会』日本評論社 2008  
柴田卓弘『イギリス自由主義の展開』早稲田大学出版部 1991  
Chushichi Tsuzuki, *Edward Carpenter 1844-1929, Prophet of Human Friendship*, (Cambridge University Press 1980)  
Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London 1889  
Edward Carpenter, *My Days and Dreams: Being Autobiographical Notes*, London 1916  
Edward Carpenter, *The Smoke Nuisance and Smoke-Preventing Appliances*, report of a Lecture given at the First College, Sheffield (Sheffield, 1889)  
Edward Carpenter, *Towards Democracy*, Parts I, II and III (London 1892) Complete Edition in four parts (London 1905 new ed. 1907)

本稿は, 文部科学省の科学研究費基盤研究費(C)の助成を受けている。